

Special Essay

アルツハイマー病からみた世界

看護学科

中島 洋子

これまで、認知症の患者自身が書いた本は世界的に数が少なく、かつて日本にはなかった。クリスティーン・ボーデン著(1998年)「わたしは誰になっていくの?」という翻訳本が2003年に日本で出版された。認知症の人が書いたことにその衝撃は大きかったが、看護・介護に携わる人、家族にとって、温かな愛と大きな勇気と知恵をもたらしたありがたい著書である。

2004年10月京都国際会館で、アルツハイマー病協会第20回国際会議が開催された。そこで講演したのは、その著者であるオーストラリアから来たクリスティーン・ブライデンさんである。彼女は1995年に46歳でアルツハイマー病と診断されたが、2年後再婚しパートナーと家族に支えられながら、講演や執筆活動を続け生活している。原稿を読みながらの講演であったが、落ち着いた立派な姿であった。約4000人の会場いっぱいの参加者からの拍手は、彼女の勇気を称える愛情に満ちた熱気で一体感を醸し出していた。その時の彼女のエネルギーの消耗はすごいものだろうと思えた。会場のアナウンスや拍手さえ、彼女の混乱を感じさせる騒音となっていたかもしれない。しかし、彼女の姿は、自分に与えられた人生を生きようとする姿そのものだった。今回の会議は、痴呆という表現を検討している転換期でもあった。

認知症の方本人が語り始め、自分の思いや立場、そして彼らの中にある個性、力を理解してもらいたいと声を発している。彼らの純粋な気持ちやメッセージが込められている。彼らは、失われていくことを感じつつ怯えながらも精一杯生き、周りの人への感謝を忘れまいとしている。彼らは、記憶を失うかもしれないが、彼らの心は生きている。それを私達は忘れてはいけない。

今や当事者を中心に物事を考えるのが当たり前であるが、認知症や障害者などを取り巻く環境では十分に理解されていない面がある。私達医療従事者は、何よりも患者の反応が重要であるはずなのに、往々にして、知識が優先し、推測のみで捉えようとしてしまうことがある。分かっているつもりで援助してきた我々の驕りを反省し、振り返ることが必要かといえる。日本で痴呆のことを「認知症」と改称されたことを真摯に受けとめたいと思う。

また、小澤勲・黒川由紀子編著「認知症と診断されたあなたへ」は、認知症と上手に付き合い、ともに生きることを分かりやすく伝えているご本人や家族向けのテキスト本で、今年1月に出版された。その中に、「認知症になると、その人がその人らしくあるものから多くを奪ってしまう」とある。援助する私達は、認知症の方が、生きる自由さを不自由にしてしまうことがないよう、その人らしさを大切に、その方の思いに耳を傾ける努力を惜しまず向き合っていきたいと思う。